
嘘と偽りの物語

文月 華観

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘と偽りの物語

【Nコード】

N4114T

【作者名】

文月 華観

【あらすじ】

「始めよう——嘘と偽りで出来た物語を」

彼は語り始める、これは嘘と偽りで出来た物語——。

魔法、魔術——全ては魔という力によって恩恵を受けた世界。

その恩恵を悪に使う者、それを排除する者が互いに生まれつつある時代——。

誰にも気づかれないうな、古びた帽子屋に佇む帽子屋店長エド——

―別名 ダウト 嘘は嘘が大好きな、道化師だ。

そして、エドの裏の顔は用心棒だった。

エドの助手にして、自信喪失なエイミルは勝気で豪胆なエドの何を見つめるのか――。

そして、エドの正体は――。

暖かい目で見てくれると嬉しいです><

是非、コメント・誤字訂正などお願いします。

―嘔吐き王の失態―プロローグ（前書き）

色々と変な表現入っていますが、是非コメントお願いします＜＜

―嘔吐き王の失態―プロローグ

「――一つ、話をしよう」

彼は言った。

そこは、誰も見たことない、どこかの場所。

あなたは、知っているようで、知らない場所で小さな白磁のカップに紅茶が入っているのを見て、水面をじっとみた。

当然、あなたの顔が映っている。

「――全ての現象は、本当だと思うかい？」

突如、彼は質問する。

突然あなたは質問されたので、戸惑いを少し感じながら考えた。

今映っているのは、間違いなく自分で、あなただ。

心臓だって、快く鼓動を響かせているし、この前友人にあって名前を呼んでもらったりもした。これがどう嘘とつけければ良いのだろうか。

だからあなたは、そうだろう、と言うつもりだった。しかしその前に彼が独白する。

「――これが全て、本当という証拠がどこにあるのだろうか？ 生きる、話す、仕事する、髪を切る、鉛筆で絵を描く――両目で見つめる世界は、本当かい？」

あなたは、黙った。

しかし、そんなことはない。

と、思いたいが、根拠たるものがない、それを証明するものなどどこにもない。

「その通り、この現実が本当に現実かなんて誰にも証明できない」見透かされている、とあなたは少しだけ、背筋が凍るような思いを馳せたが彼は気にせず語る。

「人は必ずしも、死を迎える。しかし、死を迎えた先に何が待っているのだろうか？ 本当の現実に戻っていくんじゃないか？」

——何を言っているのか、いまいちわからない。

そんなこと、誰しも考えるだろうか。

少なくともあなたの周りにいる人たちから、聞いたこともないし、話したこともない。

そんな精神的論理は、知ったことではない。

と、あなたは言うのと、彼は大笑いした。かなり真剣だったのだが、そんなに面白い要素を含んだ口調で言ったつもりはない。

そして腹を抱えて笑う彼を見て、一瞬バカになれたような気分だが、それはすぐに収まり。数十分後やっと落ち着きを取り戻した彼は潤んだ両目をこすって。

「そうさ、その通りだよ、君が言うとおりだ」

彼は、当然のごとくもちろんとうなずく。

「——こんなことを追い求めたって、行きつく先は『わからないから、放っておこう』、『考えても仕方ない』」
でもね、と彼は続ける。

「追い求めるのは、とても飽きないよ、答えがないのは」

……何も言えない。

あなたは、少し黙った。

自分だったらすぐに途方にくれてしまう。答えがない問題を永遠と探していくのだ。しかも、答えがないことを知っているの追求なんて時間の無駄にしか思えない。

彼は、口元を不敵にゆがめ、王座のような椅子に座りなおし、くりと回転し、背を向けた。

「少し話をしよう——この話は、嘘と偽りでできた悲運で、愉快な話だ」

なんだそれは、とあなたは不審に問う。

悲しくて、愉快？

嘘と偽り？

そんなのが、どこが楽しいのか。

「愉快なんだよ、滑稽でね、誰でも笑えるような——悲しむような」

寂しげに言った――が、あなたは気づくことが出来なかった。

「それでも――少しだけ心に残る話を」

それでも彼は、語る。

それはまるで暇つぶしに付き合わされているようだったが、あなたは、聞きこんでしまうだろう。

「まあ、楽に聞いてくれ、どうせ、信じるも信じないも君次第なんだからさ」

あなたは、静かにその椅子に座る彼を見つめた。

そして――彼は、語るように、諭すように話しだした。

悲運を軸にしたような――。

嘘と偽りの物語を。

「嘔吐き王の失態」プロローグ（後書き）

初めての投稿です。

初めまして、文月です。

作家志望の文月です。

よろしくお願いします。

是非ブログに遊びに来て下さい！

嘘吐き王の失態 1

エドとエイミルがある屋敷に向かった時の事だ。

その屋敷は、東の方角にある東の国。その東の王国直属の貴族の人間が住む屋敷だった。

その屋敷の主を守る、それが今回の依頼任務だった。

エドはいつも嘘つきだ。

帽子屋店長エド——別名 ダウト 嘘と呼ばれるエドは、文字通り嘘が得意で、見破るのも得意な人だ。

彼曰く嘘をついたことがない人間なんて、いないとエドは言う。

その通り、いくら純粹無垢で、バカ正直な人間でも、嘘をつくことはある。それは悪事のときでも、仕方ない時でも、嘘をつかないといけない、という状況で嘘をつく。

それが、人間だ。貴族だろうが庶民だろうが、関係なく嘘はつける。エドは、その嘘を見破ることが出来る。どんなに仕草や、行動が見えなくても嘘を見破ることが出来る。それを言うか言わないかの判断も出来る。

それも含めエドは不思議な人間だ。人間と表現していいのかは不明だが、とにかく謎が多い。

金髪に黄金の瞳という珍しい風貌に、今時シルクハットに黒の皮のベストなんてエドくらいしか着ないだろう。言動とかも少し大人びているところもある。

この世界には、魔術というものが存在するがエドは嘘を使った魔術を駆使する。

断絶魔法、嘘魔法とかエドは適当に名前を付けている、本当の名前は知らない。

氷の断絶だと、氷は嘘で、氷の元——水と、冷氣発生する。

ロスト・マジック、古代魔術とも言うべき古き魔術が存在するが、その類たぐいなのか？　とも考えたが、誰も見たこともない代物である。

魔術というのは細かな理論を蓄え、それを身に宿すことで魔術は発動できる。その理論はとんでもない量で、一つ蓄えるだけで、精一杯なのにエドは幻惑魔法まで操れるのだ。もちろん幻惑魔法も、とんでもない理論を蓄えないとそう簡単に出来るモノじゃない。

手品も得意だし、嘘をつくのも得意——本当に道化師クラウンだ。

エドは謎な人であっても、とにかく笑わせることが得意なのでよく幼児に好かれる。いつの間にか、彼の周りには多くの人間が近寄ってくれているのだ。

エド曰く、そういうのは面倒だからな、と苦笑するが彼は珍しく嬉しそうな顔を見せてくれる。不敵な笑みが彼が嬉しいということだ。そんなことを静かに思うエイミルは、帽子屋店長——エドを見た。

エドは古ぼけたソファ―に腰を沈めて、両足を机に大胆に乗つけた。三百六十度に広がる、幾つもの帽子——ヘルメットから、麦わら帽子まで、なんでも揃っている帽子は全てホコリかぶっている。帽子の売れ行きは順調ではない、今の時代帽子をかぶるのは珍しいし、それよりも裏稼業のほうが仕事があるのだ。

その薄暗い裸電球の真下で、二人が互いに座って依頼の話をしている。

久しぶりの仕事だ。

と、少なくともエイミルは思っている。

エイミルはこの仕事を手伝ってきて約五ヵ月、仕事の機会は幾らでもあるような気がしたが、今のところ一回も仕事を果たしていない。実際にこれが二回目くらいの仕事だっただろうか……あまりにも少なくて覚えていない。

「——用心棒を、してほしいのです」

この店の雰囲気似合わない、いかにもお嬢様な少女が今回の依頼主だ。

エイミルと同じくらいの年頃で、白い肌に、桃色の唇を嚙み、背筋を伸ばしている——どうみたって、そこら辺に住んでいる女の子とは言い難い。

いや、訂正しよう、実際彼女は貴族だ。

貴族の証となる、金髪に碧眼、家系それぞれ色の差はあるものの、金髪に碧眼という風貌を持った人間は、貴族扱いだ。

その依頼主は、金髪を伸ばし一つにまとめ上げ、宝石を埋め込んだようなサファイアの両目を持っている——この彼女こそが館の主の一人娘で、依頼主のアニーだ。

東の王国は、物凄い権力の争いがあり、貧困と富貴がはっきりと区別され差別される王国だ。しかし、その中でも笑い溢れる明るい国でもあるので、人々からの評価は高いが低いという複雑な状況下だ。しかし、貴族があまり好きじゃないエドが、依頼を聞くのは珍しい。

「誰を用心すりゃいいんだ」

「私の父です」

「どうして、狙われている？」

「——脅迫文が、来たのです」
話を聞いている限り、もちろん帽子を売っているというわけではない。

表向きは、帽子屋として営業しているが、裏向きは違う。

それが、帽子屋の裏稼業——用心棒なのだ。

この世界は、魔法——魔術の恩恵をうけて生活している。

よく物語で、剣と魔法の——とでてくるが、ここでは魔法、だけ。

魔術という、世界に支配され政治、環境——全てに魔術が関与している。

魔術には炎をだしたり、水を出したり——様々な魔法が存在する。用心棒とは、それらを使って文字通り、魔法を駆使したりして相手を用心するのだ。

今の時代、厄介な輩が現れるようになって、魔法という恩恵を武器

として扱わないといけない時代に変化してしまった。

エイミルも、エドも魔法は使える。この世界に存在する人間たちは皆魔術を利用し、今を生きている。

用心棒なんて、あまり生業として發揮しないと思うが、わざわざ、東の国から来たのだから、それだけ店長の腕は確かだということになる。知る人ぞ知る、帽子屋の裏の生業。というところか。

一時期はすごく盛んだったらしい、その時、店長は一人で用心棒をしていたらしく、金もそれはもう、豪邸が買えるほど儲かっていたらしい、当然エイミルは知らない。

しかし、彼には悪癖があった。

それは、酒。

酒の摂取量が、人を超えている、人が考える以上に豪快な飲み口で、誰もが息を飲むだろう。

お金をもらっていても、全て酒に消えるこの生活をなんとか脱出したいと思っているエイミルは、考えるたびに溜息が絶えなかった。一週間酒以外を口にしないことも多々あるし、酒のためなら無償で仕事をしたこともあったそうだ。

そんなこととしても、泥酔しないからなおさら不思議である。

そんなエドだが、今日は何故か不機嫌だ。

エドが不機嫌なのは、大抵酒が飲めなかったか、酒が不味かったかのどちらかだ。

しかし、エイミルは前日に酒のボトルを四本くらい飲んだのを覚えてる。

「――あー……なんで、嘘をつくんだよ」

不機嫌ではない、単純につまらないだけか。

エドは、嘘を見破ることが出来る。しかし、つまらない嘘を見破るのは嫌いで簡単な嘘をつくなど、エドは言う。

「つまらない嘘をつくなら、酒を用意しろ」

エドは言う、依頼主は貴族の証である碧眼を見開いた。

「ど、どうして……」

「お前、嘘つくのが下手だな俺に嘘をつくなんて、甘いぞ」

依頼主は啞然、誰だって啞然すると思うがエドは気にしない、しかし依頼主は眼を鋭くさせて。

「わ、わたしは……嘘なんてついてないです！」

「あつそ、ならいいけど」

あつさりと、納得するエド、思わずエイミルが不審に聞き出す。

「え？ 店長……？」

「お前は黙ってろ」

エドが一喝、黄金の瞳を依頼主に向け足を机に大胆に乗せた。

「まあ、いいや——で、報酬はどのくらいなんだ？ 金か、それとも酒か」

まるで悪党のような言い方だが、相手は気にせずに一つの用紙を渡した。エドはかすめ取るように、ぶんどってずらりと書いてあるその金額に、眉一つひそめずに、くしゃくしゃにして、エイミルに投げた。エイミルはなんとか受け止めて、しわくちゃの紙を伸ばして、眺める。

「え……えええええつ、こ、ここ……この金額」

エイミルは見たこともない金額に、眼が点になる。町一つが買ってしまうのではないか？ 一気に血の気が引く感覚を覚えたエイミルは、すぐさまに依頼主に向けて。

「いいのですか？ この金額……」

「父が助かるなら、その金額くらい容易に渡せます」

あ、そう。やはり貴族はそういう考え方なの。とエイミルは黙った。元貴族のエイミルは、なんとなくその気持ち分かる。

「で、引き受けてくれるのですか？ 帽子屋さん」

エドは、少し考えてから不敵に笑って、立ち上がった。

「いいだろう、引き受けた、明日にでもそちらへ向かう」

「えっ」

「あら、ありがとうございますわ」

小さく低頭して、依頼主は帰って行った。

驚きながらも、出入り口まで見送るエイミルは、エドに訊いた。

「何故、やろうと決めたのですか？ 店長……貴族嫌いなハズじゃ」

「別に、久々に金が欲しくなった」

「……金を費やしたのは、店長じゃないですか……」

「自業自得って言いたいのか？ そもそも酒という存在がこの世界にあるからいけないんだ」

一人勝手にうんうん、と頷くエドを横にエイミルははあ、と呆れた返事を返す。

「じゃあ、お前、酒の所為にするのか？ だったらこの世界に酒を消せばいい、そしたら俺は酒を飲まないさ、多分な」

「多分ですか」

エイミルは複雑な感情を抑えて、カウンターへとまわり、カウンタ―席に腰をかけ、エドを見る。

エドはまたソファ―に座りこんで、じっと何かを考え込んでいた。

エドが考えていることは、わからない。エイミルはそれを聞くことも出来ない、きっと聞いても、何も答えはしないだろう。それに対してエイミルは、少しだけ寂しい気分になるが、それでも、どうというわけではない。

そんなエドは、ふう、と息を吐いて天井を仰いでいる。

エドは何かを思案しているようにも見えた。

嘔吐き王の失態 2

東の王国。

港や、街道が綺麗に整っている国に入るには、関所となる館に入らないといけない。

その館の主はリードという、リードは高位なる貴族だった。王族に使える貴族で権力は強い。

「君が、我が娘が呼んだ用心棒かね！ 私を守ってくれよ！」
「ええ、もちろん、命に代えても」

エドは営業スマイルで、返した。これは誰でもわかる嘘だ、エイミルでもわかる。エドは極度の貴族嫌いなので、軽快にあいさつしても嘘だと見破るので嫌気がさすのだそうだ。

エイミルも、にこやかに会釈するとリードも、依頼主のリードの娘アニーも会釈する。とてもぎこちない。

館はずいぶんと豪勢で、豪華だ。広大な中庭に、銀の装飾や金の装飾が施され、床には綺麗な赤い絨毯。庭には、使用人だろうか、庭の手入れをしている。

「――全く、貴族臭い」

「いや、相手は貴族ですから」

エドとエイミルがいるところは、個室。用心棒様のためにと用意してくれた部屋で。エドはいらないと横に振ったのだが、リードのご厚意にもちゃんと従った方がいいとエイミルが珍しく指摘したのだ。

「あいつらは、恐らく――」

「はい？」

「なんでもない、しかし貴族は酒も飲まないのか」

「飲みますよ、高級な」

「高級だと？ ほお」

エドは偉く上機嫌だ、酒や金の事になると物凄く機嫌が良くなる。エイミルは苦笑気味に笑うと、机の上にあるエドのシルクハットを

手にして。

「店長、これいつから持っているのですか？」

常に身に離さず持っている黒と白のラインが入った、シンプルなシルクハット。エドは黄金の瞳を輝かせて。

「――ずっと昔から、ずっと先から」

「はい？」

「まあ、色々」

「それ、答えになってない気がします」

エイミルは、シルクハットを置くと、ソファ―に腰掛ける。エドはベットに優雅に寝転び。欠伸をした。

「じゃあ、どこで手に入れたんですか？」

「ああ――それはな」

エドは何かを言おうとしたが、すぐに口を閉じた。エイミルはそれが気になったが、それよりも、仕事の方が先だ。

「店長、どう思います？」

「何が」

「リードさんが狙われる理由です」

ああ、そのことか。どうでもいいようにエドは言くと、寝返った。

「俺は別にどうでもいいさ」

「どうでもって！」

「それに犯人はもう分かっている」

「は？」

は、犯人ですか！？

それが分かっているなら、もうこの用心棒の仕事終わったも同然ではないか。

「――お前、俺を舐めてるな？ 俺はただ酒に溺れる手品師じゃない、俺は嘘を見破ることが出来る手品師さ」

エドは、平然と呟くと起き上がった。エイミルは首を傾げると、訪ねた。

「分かってるなら！ 早く捕まえましょう！ そうでしょ？」

「アホか、まだ実際に犯行していない。捕まえるのなら現行じゃないとな」

「でも！」

「大丈夫だ、なら俺が予知してやる、今日、襲ってくる」

「はああああ！？ え、なんでっ、うそっ」

何故そんなことが分かるのだろう、エドが当然だと言わんばかりの言動をするものだから、本当に起こりかねない。いや、絶対起きてしまう。

しかし、エドはかなり機嫌がいいのか鼻歌まで聞こえてくる。

「あの、本当に大丈夫ですかね……」

「俺を舐めるな、お前が出来ないことを俺がやれないハズがないだろ」

なんとという自信だろうか、相変わらずといったら相変わらずであるが……。

エイミルには自信がない、強大な魔力を持ってしまった、魔族なのだから。

もし、この力が他人にぶつかり、傷を、一生治らない傷を負わせてしまったら――。

そう思うだけで、背筋が凍る。

「……」

「そう、硬くなるな、俺がいる。そうだろ」

「はい」

エイミルはしっかりと頷いた。

エドが言う言葉は全て自信に変わってくる気がしてならない。この人の言葉は嘘が多くても、どこからか力が湧いてくる気がするのだ。

それがエイミルには嬉しくて、なんでも出来ると思えるのだ。

「じゃあ、寝るぞー深夜に備えろー」

「えええ、しかも深夜ですかっ」

エイミルに緊張が走りながらも、静かにエドの個室から部屋を出た。

本当に、大丈夫だろうか。
それだけが、エイミルの心配事だった。

嘔吐き王の失態 3

——結果から言おう。

犯人は捕まった。

使用人で、庭師のアレンという青年だった。

エドは、知っていたらしいが、エイミルには驚きを隠せない状況にあった。

深夜、月もない暗闇の夜、人影は静かに一つの個室へと潜入した。今なら、誰もいない。リードの寝室に潜り込み、目の前にリードがいると確信して、音もなくナイフを掲げた——。

これで——。

しかし、それを目前に、

「そこまでだ、少年」

若い、男の声が聞こえた。

「！」

どこからだ、今の声はどこから聞こえた！？

少年は、ナイフの動きを止め、必死に警戒する。しかし、窓から零れる月光もない。電球もない。

何も見えない、闇の世界だった。

「——全く、こんな新月な夜に暗殺を企てるなんてね、俺は新月の方が好みなんだが」

そんなこと、誰も聞いてない！ 知るか！

とは言わないが、必死に気配を探る、探ってもただどこからか吹く風が冷や汗を飛ばしてくれるだけだ。これではマズイ、と本能が吠え、焦燥感が背中に伝わる。

そして、闇の声はまだ聞こえる。

「新月だと酒がうまいんだ、ニホンシュって知ってるか、あれはお

いいんだ」

知らんわ——！

と、なんとか叫びたい気持ちを抑え、声をあげた、とても荒げてしまった。

「誰なんだ！ あんたは」

「俺、俺は手品師だ」

あっさりと素性を言う、相手は道化師だと言った。

「ど、道化師——？」

「道化師——、まあ、そうだな。そうさ、別名^{ダウト}嘘色々な名前があるんだよな俺、適当に呼んでくれ」

「俺は違うつ、猫が入ったから取り戻そうと」

「今更な嘘やロウだな、お前はっ！」

一瞬だけ、月のような黄金の輝きが、見えた気がする。

今のが、声の主か！

「この状況で嘘をつくか！ 例え明日世界が崩壊するとか言っても俺には無駄だ！ 俺に嘘をつくなんぞ——五万年早い！」

今更言っても何も変わらないのだが、必死に叫んでしまう。

そして、黄金の輝きは寸前へと距離を詰めてくる。なんとかナイフで防いだが、黄金の光のような相手は翻してくる。

——来る！

しかし、突如襲うのは、誰でも見る拳だった。

「アホかあああああああああああああああああああ」

近所迷惑極まりない声と。

「エドっ！ ストップ！！」

必死に止めようとする声。

「うわああっ」

そしてアレンの情けない声と、黄金の眼を持つ少年と、どこからかの女の声が重なった。

いつの間にか、視界がクリアになって、全てが見えた、目の前には拳と黄金の髪に瞳をもつ、シルクハットをかぶった少年だった。

自分と同じくらいの年齢——いや、年下くらいと言ってもいい。

その隣には長い栗色の髪を持ち、澄んだ紫の瞳をもつ少女がいた。

そして、寝具を来たリードが真っ赤に赤面して、体中を震えあげていた。その横に居るアニーも、家族そろって同じだった。

「殺せえっ」

リードが開口一番に吠えた。

「そいつを締め上げろ！　なんで私を殺そうなんて目論んだ！　殺してしまえ！　用心棒！」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

少女がすぐさまに制した。

俺の事を、庇っているのか？

「この人はまだ、私と同じくらいの年齢なんですよ？　殺すなんて——」

「うるさいっ、黙れ黙れ！　貴様らは用心棒なんだぞ！　金を払ってやってるんだ！　命令に従え！」

「——って、あなたに、命令されているワケじゃ」

と、小さく呟く少女の声が聞こえた。

すると、拳を引いた金髪の男はアレンを引っ張り上げた。軽々と片手でだ。

「わあっ！？　離せ！　俺にはやらないといけないことがあるんだっ！」

アレンはこげ茶の髪を乱しながら、吠えた。

「だまらっしゃい！　お前に発言権は無いんだよ！　そんなに発言したいなら酒を用意しろ！」

あんたはさっきから酒の事ばかりじゃねえか！

と、叫びたいアレンだが、なんとも威圧感があって反論できない。横に居る少女も呆れているのを見た。

「すみません、こいつを騎士団に連行しますね、私たちの手じゃこいつの罪を裁けませんし」

「はっ？」

た、確かに貴族に牙をむけるのは重罪だ、騎士団に追いやられれば、処刑……いや、軽い罪にはなるのか？ まだ未遂だし。

「それに、貴族に刃向けようとしたのですし、重罪ですから首の一本は飛ぶでしょう」

な、なんだって！

アレンは、絶句——いや、最初から絶句していたが、まさかそんなことになるなんて……。

しかし、とアレンは心の中で否定した。

処刑されるつもりで、こんなことをしたんだ。覚悟は出来ているし、あの子のためになら、もう——。

「て、店長、首は一つしかないですよ」

「うるさいわ！ あのなら、俺が言ったことに文句あるなら酒を用意しろ！」

「酒の事ばかり」

少女はまたも呆れた。

エドはそのまま持ち上げられたまま、

「では、失礼します。用心棒の仕事とはいえ、あなたを危険にさらしました」

「いや、別室に移動させてたじゃないですか」

エドの言葉に、エイミルはすぐさまに突っ込みを入れる。そうだったのかとアレンは納得するばかりである。

リードは何か言いたそうな雰囲気であったが、エドがどんどん押し寄せるように口を開いていく。

「なので、こいつは騎士団に引き渡します。報酬は結構、では失礼」早口にしかも、丁寧に一方的に言って、エドは去った。それをエイミルはついていくしかなかった。

「お父様」

「……アレンという男、確かに病院に――」

数秒、唾を吐きながらも最後まで言おうとアニーは、頷いた。

「確かに、いますわ」

「成程……それで俺を狙ったということか」

「お父様？」

「アニー、すぐに首都へと行くぞ」

「……はい、お父様」

リードの歪んだ笑顔をアニーはただ見つめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4114t/>

嘘と偽りの物語

2011年10月9日02時53分発行